

2019年9月22日 発行

東京フレンド

第507号

聖句

おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。
(ローマの信徒への手紙15・2)

相手を理解しようと考え続けること

それが人とのつながりを太くする

中村綺布代

これまで、いくつもの外国に行きましたが、初めての海外旅行は高校生の時のジョージ・フォックススツアーでした。大学2年の時、米シアトルに1か月半滞在して、帰国後、友会から参加を勧められて、フィリピンで開かれたアジア太平洋会議に参加しました。

そして、1年後にはケニアで開催されたフレンド世界会議に出席することになりました。大学を卒業後は学習塾の会社で就職して、中国に派遣され、北京在住の日本人の生徒を教えてきました。そのような経験から感じたことをお話しします。

ケニアでは、帰国する時に荷物をまとめて集合場所待っていたのですが、空港行きのバスが時間になっても来ませんでした。私は何とか間に合いましたが、早い時間の飛行機を予約していた国の人は乗り遅れてしまいました。ところが、ケニアの人はあわてませんでした。日本では正確な時間に次々と電車が来ることを当然と考えますが、国によって満足の度合が違ふと感じました。

中国で困惑したのは、おせっか

いです。日本人は相手が何を求めているかを気にして世話をしますが、中国人は自分が良いと思ったら、相手の気持ちにかまわず実行します。足し算です。

梨木香歩の本に、英国クエーカーのウエスト夫人の話があります。世の中がイスラムの人は危険だという雰囲気があるなかで、ウエスト夫人はイスラムにはイスラム文化のバックグラウンドがあると云って、彼女の下宿に受け入れます。

私は海外生活で、いろいろなリスペクトの仕方があることを学びました。「あなたのやり方は私には合わないけれども、あなたの好意は受け取ります」という気持ちで

お招きありがとうございました

H・A

学校の教室や講堂とは違う温かい雰囲気の中で礼拝を守ることができ、普段よりも背筋を伸ばして礼拝を過ごすことができました。

入学して2か月が経ちました。だんだんと授業にも慣れてきて、最初は不安だった礼拝も今では落ち着いて過ごせるようになりました。これから楽しいことも、悔しいこともたくさんあると思いますが、礼拝を通して落ち着いた毎日を過ごしていきたいと思います。

K・A

入学した頃は、中学校生活や新しい友だちに戸惑うこともありましたが、今では生活にも慣れて、友だちと話していてもぎこちなさがなくなりました。とても楽しい毎を送っています。

これからはクラブ活動も始まり、忙しい日々になりますが、きっと充実した生活が送れると信じています。さまざまなことに積極的に挑戦し、友だちとの思い出をたくさん作っていきたいです。



中学入学を祝う会

6月6日 開催

普連土学園中学生 135 人を迎えて

時代が変わる。制度が変わる。そんな節目のどん尻を歩んできた男がいる。だからどうということではない。「へえ〜」ですむことであるが、振り返って偶然や運の面白さに気付いた。茶飲み話しやヒマつぶしのネタにはなるだろう。

時代の節目のどん尻を生きて

小川 孟

この国には元号というものがある。なぜ？とか、その歴史は？とかは、この際、脇に置く。近いところでは、明治、大正、昭和、平成がある。それぞれ長さが違い、その間の出来事にも特色がある。

『明治といえは維新と応える』

『大正といえはデモクラシーと応える』という具合であるが、昭和となると、その時代を生きた人間がまだ大勢いるのでコトは簡単ではない。『昭和といえは敗戦と応える』には異論はないだろうが、そこに至るまでの、そして、その後の体験はさまざまである。

元号は「令和」となり、「平成」が後世どのような評価をされるかわからないが、『憲法改正』（改悪？）は、「令和」になるまで第9条をなんとか維持してきたが、戦争機材の爆買は進めて支払い「令和」につけた。第25条には、「文化的で、人間らしい最低限度の生活を営む権利の実現を国は果たす努力義務がある」と述べてき

た。だが、大した努力もせず「令和」になったとたんに、文化的、最低限どころか、『自己責任で老後の生活費2、000万円の貯蓄に励め』ときた。時代の節目は油断がならない。

大正のどん尻

さて、平成から令和への節目を目の当たりにした男は、同世代の仲間がほとんどあちらの世界に移住して、自分が「どん尻」になっていることに気付いた。

そもそも生まれからしてどん尻なのだ。大正は1912年7月30日から1926（大正15）年12月25日までである。1923（大正12）年9月1日の関東大震災は現在も語り継がれているが、この男はその2年後、まさに大正のどん尻、1925（大正14）年10月25日に東京府代々幡町幡ヶ谷（今の京王線幡ヶ谷付近）で出生と戸籍謄本に記載されている。翌1926年12月25日からは昭和である。

幼稚園では♪ショウワ ショウワ ショウワノコードモヨ ボクタチハ：と歌った。大正の子どもの歌はなかったもので、♪昭和の子どもは僕たちは〜と、大正のどん尻生まれは昭和の子どもと一緒に歌った。

小学校の教科書

1932（昭和7）年4月、尋常高等小学校の尋常科1年生になって最初に習った国語読本は、「ハナハト」版だった。1918（大正7）年から使われてきたこの教科書は、「ハナハト マメマス カラスガイマス スズメガイマス」で始まり、そのような絵がモノクロで印刷されていた。ところが、翌1933年度（昭和8）から「サクラ」読本に替わった。しかも色刷りである。「サイタ サイタ サクラガ サイタ」と1年生が読んでいた。大正生まれは「ハナハト マメマス」教科書を使うどん尻の小学生だったのだ。



ちなみに当時の小学校は、現在の義務教育6年が尋常科、その後2年間の高等科があった。尋常科

を卒業して全員が中学校へ進学するわけではなく、丁稚奉公や子守りも珍しくなかった。この小学校も1941（昭和16）年には国民学校と改称された。

徴兵年令が19歳に

明治時代は戦争の連続であった。「大正」で一息ついて自由、モダンな風潮が漂ったが、日清、日露戦争に関連する軍人の美談は教科書にも載せられていた。「昭和」になっても「のらくろ一等兵」「冒険ダン吉」など漫画も、軍人や勇ましい物語が主役であった。中学校に進学した1938（昭和13）年は、前年の7月7日に始まった日中戦争により、必修科目の「軍事教練」が強化された。教員室とは別に配属将校の部屋があり、退役の将校が常駐していた。「野営演習」と称して、富士の裾野の兵舎で数日間の訓練も行われた。

すでに長引いていた日中戦争に加えて、1941（昭和16）年12月8日、日本海軍の真珠湾攻撃によって太平洋戦争に拡大した。そのため、兵員の不足を補うために国は1943（昭和18）年に徴兵令を改正し、従来の20歳を19歳に引き下げた。まさにその年の3月、18歳で中学校5年を卒業し、進学か就職か、あるいは少年兵志願か

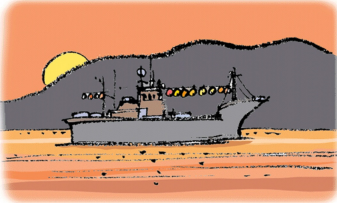
という選択を迫られた。学業はあまり得意ではなかったたので、お国のためと、飛行機のエンジン部品を作る工場に就職して検査工になっていた。ところが、1年足らずで19歳の徴兵検査の通知を受け取ることになったのだ。これは「どん尻」ではなく、「真つ先」に当たってしまった。

中国派兵

1944（昭和19）年12月5日、本籍地静岡連隊に入隊して一兵卒として中国に派遣された。博多から釜山までの海路は米海軍の潜水艦によって封鎖されていたが、無事に渡れた最後の部隊であった。日本軍は1944年4月から45年2月にかけて大兵力を動員して「大陸打通作戦」を実施した。そのための本国からの最後の補充兵、つまり「どん尻部隊」の一兵卒だった。

釜山から朝鮮半島を北上し、12

月25日、クリスマスに南京に到着した。南京兵站を出発したのは翌1945（昭和20）年1月21日、それから約3か月かけて1、300余キロを歩き続け、4月29日、目的地の弥陀市に着いた。70余名の新兵のうち20名が落伍した。よたよたのどん尻でもなんで



も、とにかく目的地にはたどり着いた。

終戦、捕虜、復員

初年兵の訓練や討伐作戦への出兵など慌ただしい駐屯地での生活は、たった4か月足らずで終わりとなった。1945（昭和20）年8月15日、日中、太平洋戦争終結。日本軍は全員捕虜となった。日本の国がどうなっているかは全く分からずに中国の農村（現在の湖北省仙桃市）で捕虜生活を送った。後続の兵士はいないから、「どん尻一兵卒」は続いた。

帰国の見通しは分らず、分宿していた農家の手伝いなどをして帰国を待った。鉄条網や監視兵のいない農家での生活は、敗戦国の捕虜としては異例といってよいのどかな日々であった。

終戦から9か月経った1946（昭和21）年5月10日、中国軍は武漢への移動を命じた。ようやく

帰国である。武漢から上海へ、そして6月15日、米海軍輸送船は日本へ向けて出港し、同21日博多港に着岸した。博多から出航した「どん尻一兵卒」は、中国からの日本軍「どん尻復員兵」となって帰国した。19歳の男は

21歳になっていた。

まだあったか！どん尻人生

帰国して父の実家で家族に再会した。そこで静養させてもらい、マリアの発作も治まってきたので、11月には新しい人生を始めるためにとりあえず東京へ出た。大森区（現・大田区）雪谷のわが家は米軍の焼夷弾で焼失していたので、中学時代の友人を頼って居候させてもらい予備校に通った。翌1947（昭和22）年、無事早稲田大学専門部工科電気科に入学して新しい人生の一步を踏み出した。ようやく「どん尻」からおさらばした22歳の再出発のはずだった。

ところが、世の中そんなに甘くない。一旦取りついた「どん尻」は、22歳の大学新入生がまさかのどん尻だった。入学試験の成績ではない。この年、学制改革が行われたのだ。これによって大学は4年制となり、専門部は廃止された。在学中の旧制最後の学生は、専門部3年卒業後、学部4年への進学も認めるという特例もあった。しかし、旧制大学最後の「どん尻学生」は就職することにして、25歳で卒業した。

つぶやき

その後の人生は、人様から見れ

ば意見があるだろうが、本人は「どん尻人生」とは実感せずに卒寿を超えた。「どん尻」の掉尾（ちようび）には、「平成のどん尻」というのも悪くないと、ひそかに思ったこともあった。ところが、ラグビー・ワールドカップの日本開催やオリンピック・パラリンピックと魅力的なイベントが続く年代となり、あつという間に「令和」になってしまった。

こうなれば、あちらで楽しくやっている同世代の仲間に出会ったときに、「おまえがどん尻だ！」といわれたら、「令和のトップだ！」と返せるかも…。

★筆者は10月25日、94歳の誕生日を迎える。

集案案内

▽日曜礼拝会

毎日曜午前10時半～11時半

▽事務会

第3日曜午後12時半～

▽クエーカー学習会

第1日曜 午後12時半～2時

▽讚美歌練習

第2日曜 礼拝会後

▽社会平和問題懇談会

第2日曜 午後12時半～2時

▽聖書を読む会

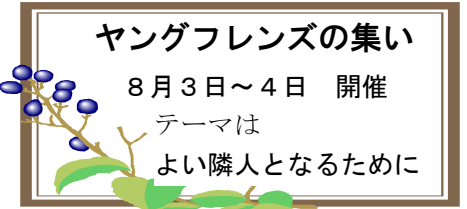
第4日曜 午後12時半～2時



性別に関係なく話し合える良い機会となりました。特に印象が強いのは、外国の貧しい子どもに安易に

久しぶりに同級生たちと礼拝に参加し、共に讃美歌を歌って、同じ時間を共有しているうちに、普連土での経験は大学とはベクトルの違う貴重なかけがえのないものだったと気づかされました。このように集まって過ごす機会は本当に大切なことだなあと感じました。

(大学生 癸生川明穂)



ヤングフレンズの集い

8月3日～4日 開催

テーマは

よい隣人となるために

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」(ルカ 10:27)をテーマに中学生と大学生、会員・会友が集いました。感想文を紹介します。

お話

榎本真奈

今日は私が普連土学園で学んだこと、卒業後どのように過ごしているかについてお話しします。在学時代は、さまざまなことに対する関心を広げ、自分なりに感じ、思い、考える時間がたくさんありました。東日本大震災を目の当たりにし、福祉や社会学を学んでみたいという気持ちが大きくなり、高校卒業後は立教大学コミュニティ福祉学部へ進学しました。大学では、東日本大震災で被災した小中学生をはじめ、カンボジア、フィリピンなど、さまざまな地域に暮らす子ども達と出会う機会に恵まれました。大学卒業後、高齢者介護の仕事に就きましたが、結婚を機に退職し、現在は、地元・埼玉県の児童発達支援事業所で児童指導員として勤務しています。児童発達支援事業所とは、障が

お金をあげないという榎本さんのお話です。よき隣人となるには、自分の行動にしっかりと責任を持つて相手と接することだと考えました。

(中学1年 M・K)

自分を受け入れてもらえる場所が大学でみつからず、ずっと悩んでいたのですが、ヤングフレンズに来て、自分はこういう場所を求

いを持つ小学校入学前までの子どもが通う施設です。一人ひとりが持つ能力を社会の中で十分に発揮できるように、それぞれの個性や発達のペースに合わせながら支援を行っています。



今回、ヤングフレンズの集いのテーマとなっている聖書の箇所は、「善いサマリア人」です。「隣人」とはどんな人のことを指すのでしょうか。私にとって「隣人」は、相手の痛みを気付けること、そして相手と関わりを持ち続け、愛を注ぐことができる人、そして、神様が「関わりなさい、愛しなさい」と示された人のように思います。これまでの経験を振り返ってみますと、自分以外の誰かに目を向け、心を寄せること、自分がどのような人々と関

わっていたのだなと感じました。

(大学生 立元葵)

フレンドの礼拝は一人ひとりが神さまと向き合うことを大切にしたい、自由が尊重されていると思えました。統一した価値観を教えられないのではなく、一人ひとりが自分にとっての意味を見いだしていたのも印象的でした。目に見えな

わりを持つて生きていくかを考えることは、普連土学園での日々によって培われてきたと感じます。毎日の礼拝や授業を通じて見聞を広げ、遠く離れた誰かの痛み、そして自身が抱える弱さに気付くことができたことは、その後の私にとって大きな糧となりました。多感な十代に、聖書の言葉や讃美歌に出合い、イエス・キリストに対して思いを巡らすことができたことに感謝します。また、中高時代に誰かの力を借り、時に力を貸し、行動するといった経験を積めたことは、大学進学後の自信へと繋がりました。社会人となった今は、学生時代に学んだことを少しずつ世の中に還元するために与えられている日々だと思っています。まだまだ道に迷ったり、誘惑に負けてしまったりと至らない点も多いのですが、これからも自身の視野を広げ、歩み続けたいです。

いものを信じることを大切にすることがキリスト教だと気づかされました。

(大学生 三浦洋人)

発行

キリスト友会東京月会
住所・東京都港区三田4-8-19
TEL・FAX 03-3451-7002
メール・mail@kristutoyukai.org